



手のひらや足の裏に「ほくろ」ができるといけないの

「ほくろ」はメラニンが集まったもの

「ほくろ」は、皮膚の少し中のところ（表皮と真皮の間）に、メラニンという茶色の色素が集まってできたものです。

人間の体の皮膚には、少し色がついています。これは、皮膚の少し中のところで、メラニンという茶色の色素が作られるからです。このメラニンは、ふつう、皮膚の中に平均に広がっていますが、何かの原因で、1か所にかたまってしまうと、ほくろができます。

ところが、手のひらや足の裏の皮膚には、ふつう、このメラニンの色素をつくる細胞が少なく、角質層が厚いため、ほくろができて目立たないのです。

そのため、手のひらや足の裏にほくろができると、「とったほうがいい」といわれることがあるようですが、できて心配はありません。

取ろうとしていじったりすると、かえって傷あとが残ったりします。

しかし、ほくろの中には、手のひらや足の裏にかぎらず、まれに、ほくろの「癌」になるものがあるため、注意が必要なのです。

ほくろの癌になると

ほくろが、半年以内で直径7ミリメートル以上に、急に大きくなったときや、ほくろの周りが黒い色がしみ出したように見えるときには、ほくろの癌のことがあるので、すぐに皮膚科のお医者さんに、診察してもらったほうがよいようです。

ほくろの癌は、そのままにしておくと、体じゅうに広がる危険がありますが、早く見つけて手術すれば、完全になおります。（監修・保志 宏）

